

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530542

研究課題名（和文）：非行の抑制因としての恥意識に関する研究

研究課題名（英文）：Shame as Restrained Factor of Attitude toward Delinquency

研究代表者：

松井 洋（MATSUI HIROSHI）

川村学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：00095465

研究成果の概要：

本研究の目的はわが国の青少年の非行的態度に影響する要因について検討することである。この目的のため、日本とトルコの中学生、高校生、大学生を対象に恥の意識を中心に調査を行った。結果は、非行的態度の抑制因は価値観や道徳意識などの、いわゆる認知的なものではなく、むしろ情緒的と言いつる、恥意識が重要であるというものであった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	6000,000	180,000	780,000
総計	2,300,000	420,000	2,720,000

研究分野：社会心理学

科研費の分化・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：恥意識、非行的態度、国際比較、価値観、トルコ、中学生、高校生、大学生

1. 研究当初の背景

本研究の目的は、わが国の青少年の非行的態度に影響する要因について検討することによって、非行を抑制する要因を明らかにする。そして、これによって非行を抑制するためにはどのような心的機能を育成すべきかを明らかにすることである。

研究代表者らは、次項研究経過のように、1980年代後半より、青少年の非行的態度について研究を行ってきた。ここで言う非行的態度とは、非行を実際に行う青少年の態度ではなく、一般の青少年に、非行的行為を許容するような危うい態度や考え方があるということである。つまり、青少年一般の意識が問題だと考えているわけである。そのような態度は、思いやり意識、道徳意識、価値観、人生観、恥意識などから構成されている。そして、アメリカ、中国、韓国、トルコなどの中学生と高校生を対象とした比較研究から、上記の多くの点において、わが国の青少年には問題があり、そしてこの問題傾向は、経年比較によると、悪化の方向をたどっている。われわれは、現代の日本の非行の問題も、背景にはこのような態度があると考えている。

青少年の非行の問題の原因として、われわれは、上記のような、青少年の生き方や考え方の悪化という問題があると考えている。そして、このような青少年の生き方や考え方の構造を理解し、非行につながる要因と、非行を抑制する要因を明らかにすることが、わが国の非行の問題を解決する鍵となると考えている。

2. 研究の目的

われわれは最近の研究によって、非行を許容する意識と最も関係の深い要因は良い悪いという道徳意識のような認知的な要因よりも情緒的な要因ではないかと考えている。それはたとえば、恥意識、それも他者の目を意識した恥意識ではないかと考えるに至った。そして、このような恥意識が、わが国青少年の非行を抑止する要因ではないかと考えている。

恥意識を形成することによって、非行を抑止することが期待されると考えているわけであるが、恥意識の構造、非行抑制機能と形成過程についてはまだ検討しなければならない課題が多い。また、われわれのこれまでの研究では、恥意識と言っても1因子ではなくいくつかの意識の構造を持つのではないかとということが示唆されている。

また、恥意識は親、特に母親との関係と深い関連があるのではないかとということが示唆されている。しかし、恥意識の形成と母子関係の関連について、男女や中高によってかなり違う様相があると思われる。

以上の知見に基づいて、あらためて恥意識の構造と形成過程について検討する調査研究を企画した次第である。

加えて、トルコ共和国の中高生との比較調査を行う。これは、わが国の青少年の非行や恥の意識の特徴を明らかにするためには異なる文化圏との比較が有効と考えたからである。トルコ共和国は、イスラムと言う原理を持ち、伝統的家族関係を持つ、わが国の現状とは対照的な国であり、比較対象の文化圏として最適と考えた。

この研究の目的についてまとめると、

- 1) 少年の非行的態度の背景にある、生き方や考え方の問題について検討する。非行を抑制すると思われる主な要因として道徳意識、恥意識が考えられる。そこで、これらの要因について構造を明らかにする。

- 2) それらの要因の非行的態度に対する抑制要因の機能について検討する。
- 3) 上記のような非行的態度や、抑制要因を発達、形成させる規定因として親子関係が重要と考える。そこで、どのような親子関係が、上記のような、望ましくない、あるいは望ましい態度を形成するのか検討する。
- 4) 以上について、日本の異なり伝統的な家庭が維持されているトルコ共和国と比較検討を行う。

3. 研究の方法

前述の目的のために以下の調査を行った。

(1) 調査対象者

都内および近郊の大学生 518 名 (男 172 名、女 346 名) およびトルコ地方都市の大学生 436 名 (男 186 名、女 250 名)。

(2) 調査項目

堀内他 (2005) から非行許容性 (非行的な行為をどの程度「悪い」と考えるか) について 10 項目、恥意識 25 項目、親子関係について、父母別に 14 項目ずつ計 28 項目、また、価値観について、他者志向 享楽志向、努力志向、将来志向の各々 3 項目の 12 項目。以上についてそれぞれ 4 件法で回答させた。

4. 研究成果

基本的テーマは以上のとおりであるが、分析は 3 部に分かれる。そして、それぞれの担当者がそれぞれの立場から分析を行っている。その意味で、この報告書は 3 つの論文の集合とも言える。

1 つ目の論文は、恥意識の構造や国際比較について、2 つめは恥意識と非行的態度との関係について、3 つ目は親子関係と非行的態度についてである。

それぞれの論文は互いに独立しているが、3 つを合わせることで非行的態度を抑制するという研究の目的に対するわれわれの答えが述べられていると考えている

この報告書は以下の 3 つの問題について、それぞれ 3 人の著者による独立した論文の形式をとっている。その結果の概要は以下ようになる。

1) 恥意識の構造と国際比較

(1) 中高生から大学生まで対象を拡大した調査によって、恥意識の構造を確認した。日本の生徒・学生のデータでは自分恥、他人恥、仲間恥という 3 因子構造が確認された。また、3 つの恥意識間の関係では、自分恥と他人恥は中程度の相関を有しており、仲間恥は他の 2 つとは低めの相関であった。この傾向についてもわれわれの先行研究と同様であった。

(2) 上記の 3 つの恥意識を用いて、属性間の比較を行ったところ、自分恥と他人恥については、日本とトルコでは、全般的にトルコのほうが得点が高い傾向にあった。2 つの尺度に共通して、トルコ中学生女子が最も得点が高く、日本高校生男子の結果が最も低かった。

(3) 自分恥については、トルコでは属性間の差があまり明確ではなかったが、日本では、中学生と高校生男子のグループ、高校生女子と大学生のグループに分かれた。

(4) 他人恥については、日本では、高校生男子が最も低く、大学生女子が最も高いという以外で

は、属性間の違いが明瞭ではないが、トルコでは、男子よりも女子のほうが高い傾向が見られた。

(5) 仲間恥については、日本とトルコの違いはあまり明瞭ではないが、日本の女子の得点が高く、トルコの高校生男子と大学生の得点が低いという結果であった。

(6) 以上のことから、恥意識は中学生から高校生、大学生へと直線的に発達していくものではないことが示唆された。

(7) また、トルコとの比較では、相対的に日本は自分恥と他人恥は低く、仲間恥は特に女子において高いという傾向が見られた。これらのことから、3つの恥意識はその発達過程や形成過程に性差があり、さらには機能的にも相違があるのではないかと思われる。(担当：堀内勝夫)

2) 非行的態度の抑制要因

日本の若者の、非行に対する態度を抑制する要因を明らかにすることを目的に、非行許容性、価値観、恥意識、そして、親子関係についてその構造を検討するために中学、高校、大学生合計2006名を対象に調査を行った。ここから中高大×男女均一の対象者をサンプルとした。調査内容は、非行許容性、恥意識、親子関係、また、価値観について、他者志向 享楽志向、努力志向、将来志向である。

非行許容性は不良行為許容性と犯罪許容性の2因子構造となったので、この2因子を従属変数とし、恥意識、親子関係、また、価値観について、他者志向 享楽志向、努力志向、将来志向の因子を説明変数とする重回帰分析を行った。

結果は、不良行為許容性については、まず他人恥、次いで父親からのしつけが高く、享楽志向、将来志向、仲間恥が低いと不良行為が高いという結果であった。

犯罪許容性についても、非行許容性と同様に重回帰分析を行った。その結果、最も影響の大きい変数は他人恥であり、次いで、自分恥の2つの尺度が有意となった。

これは、松井(2006)の結果と概ね矛盾しない結果であったと言えよう。

他方、本論文の「父親のしつけ」が不良行為に対して有意な影響を持っているという結果は、父親の影響の低さが問題とあることの多いわが国では、注目すべきことであると考えられる。

(担当：松井洋)

3) 親子関係と青少年の非行的態度

親子関係の良否と子どもの恥意識の高さの関連を、実際の親子を対象に実施した調査に基づいて親の視点から明らかにすることを試みた。

結果は、親からみた親子関係の親密さが子どもの非行抑止要因としての恥意識の形成に寄与することを示した。これは、子どもの視点から見た親子関係の良好さと子どもの恥意識の関連性を示した従来の我々の研究結果に対応するものである。したがって、親子の心理的距離の近さが、子どもの非行や犯罪に対する抑制要因としての恥意識の形成を促している可能性を親の視点から確認することができたと言えよう。

ただし、父親の子どもに対する心理的距離の近さが必ずしも子どもの自分恥の高さと関連するわけではないことも明らかになった。その原因を探るべく分析を重ねたところ、たとえば父親から見た子どもとの心理的距離が近くても、父親自身の自分恥がある程度高くなければその子どもの自分恥は高くないことが示された。このように、父親自身の自分恥の高さ(低さ)が親密な親子関係を基盤にして子どもの自分恥の高さ(低さ)に関連する傾向が認められたことから“親自身の恥意識は、子どもとの親密さを介して子どもの恥意識に影響を与える”という恥意識の形成過程に関す

る新たな可能性も見いだされたと言える。この結果が示唆しているのは、子どもが親をモデルとして恥意識を形成していることに他ならない。したがって、子どもの非行抑止要因としての恥意識を高めるためには、親密な親子関係を築くこと、そして親自身（特に父親）が恥意識をもつことが重要であると考えられる。とはいえ、本研究の結果は、ごく限られたサンプリングによる親子対応マッチング・データに基づいている。サンプル数が少ないために、統計的検定を経ずにクロス集計の結果を解釈した。また、子どもの性別分析を行わずに全体的傾向のみを示すにとどめた。本稿において示唆された恥意識の形成に関する新たな可能性を実証するためには、さらなる追試研究を行うことによって、親子関係と子どもの恥意識との関連をその形成過程を含めてさらに詳しく検討する必要がある。（担当：中村真）

5. 主な発表論文等

(1) 雑誌論文

松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之 2009 「非行的態度の抑制要因に関する研究Ⅱ」川村学園女子大学研究紀要, 第20巻, 第1号, 77-90.

中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之 2009 親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ —親からみた親子関係と恥意識の形成—川村学園女子大学研究紀要, 第20巻, 第1号, 91-102.

(2) 学会発表

堀内勝夫・松井 洋・中村 真・中里至正 2008 「恥意識と非行的態度に関する研究（1）恥意識の構造」日本社会心理学会第49回大会発表論文集 354-355.

松井 洋・六角絵里子・中村 真・堀内勝夫・中里至正 2008 「恥意識と非行的態度に関する研究（3）非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係」日本社会心理学会第49回大会発表論文集 358-359, .

中村 真・松井 洋・堀内勝夫・中里至正, 2008 「恥意識と非行的態度に関する研究（2）—親子関係と恥意識の形成」日本社会心理学会第49回大会発表論文集 356-357.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 洋 (MATSUI HIROSHI)

川村学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：00095465

(2) 研究分担者

中村 真 (NAKAMURA SHIN)

川村学園女子大学・文学部・准教授

研究者番号：70281318

(3) 連携研究者

堀内勝夫 (HORIUCHI KATSUO)

産業能率大学・HRM研究センター・研究員

中里至正 (NAKASATO YOSHIMASA)

東洋大学・名誉教授

近藤幸子 (KONNDOU YUKIKO)

トルコ共和国 チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学・教育学部・講師